

「徒歩で行く150億年の旅—歩こう。宇宙の塵がヒトになり種の大量絶滅に直面するまでの旅を」

エリザベット・サトゥリス(著)、太田直子(訳)

バベルプレス 2008年8月20日刊

いまドストエフスキーやトルストイなどの名作を再読するのがブームだそうだが、義務教育で習った歴史や生物学を学び直すことも必要になっている。というのは、古代史や宇宙の生成から、生命の誕生と進化の歴史は、大きく書き換えられてきているからである。

本書はヒューレット・パッカード社が作成した1.5キロを歩きながら地球誕生以来50億年の生命の進化の歴史を学ぶ可搬型展示「時間散歩—宇宙塵から人類まで」に基づいている。この展示の散歩道では30センチが100万年に相当する。微生物は地球の始まりから300メートルのところで出現したのに対し、人類が出現したのは最後からわずか90センチ手前であり、氷河期が終わったのはわずか3ミリ手前である。太陽が燃え尽きるまであと約20億年、約600メートル残っていることになる。

このような巨視的なスタンスで地球を考え直すことは様々な意味で重要だ。まず何よりも奇跡的なことは、地球が誕生してから、10億年の間に、無機質の物質があたかも目的に向かっていくかのように化学反応を繰り返し、地球を生命体が生息できる環境に整えていった過程である。また、生命を授かった微生物が生き残りのために様々な戦略を労して進化してきた。ここで観察される事実、ある特定の環境に最も適応した最強の生物は環境の変化に適応できず滅亡してきたのに対して、強くもない小形生物が比較的環境に適応して生き延びてきたということである。人類は地球への新参者であり、微生物の築きあげた土台の上で、生物界でもそれほど強くない存在であったが、知能を発達させ、ついに地上最強の動物へと変貌を遂げている。

著者は人類は地球環境の破壊者になるのではなく、知性を生かしてその危機を回避し、その結果として生き延びることも可能であるとの立場に立つ。人類の知性が、自らの生きている地球の来し方行く末についてここまで理解しているということを、すべての人類が共有できれば、今後の世界のあり方、人類の生き方も変わってくるはずである。人類必読の書だと言っても過言ではないだろう。